情報モラル教育　白河市立表郷小学校

キーワード：情報モラル教育の今、じっくり、たっぷり、タブレット活用場面

Ⅰ　研究について

1　情報モラル教育に関しての学校課題

１年次（令和３年度）は「トラブルにその都度向き合い、教育するチャンスとする」を合い言葉に、情報モラル教育を学校の重点に掲げ、道徳科と学級活動(2)の授業と子どもの姿から、情報モラル教育を推進した。多くの成果を見いだした一方で、課題が３点見えてきた。

国語科や算数科といった他の教科等での指導
保護者と共に情報モラル教育を進めていく体制とあり方
育てたい子どもの姿と「この学年・この時期だからこそ」を踏まえた全体計画・配当

２年次（令和４年度・今回）は、昨年度の研究の成果を生かしながら、研究テーマの基、「教科等での指導」「保護者との連携」「全体計画の改善」の３点について研究を進めてきた。

2　実践概要

（１）研究テーマ

ルールからマナー、そしてモラルへ ～表郷小学校「ならでは」「だからこそ」の情報モラル教育を考える～

（２）３年間の見通し

１年次	実態把握を生かした授業構想と指導カリキュラムの作成 （タブレット導入時の困り感・家庭での実態からカリキュラムをつくる）
２年次	情報モラルを育む指導の日常化と家庭との連携 （教科タブレット活用場面での「小刻みな情報モラル指導」と家庭啓蒙）
３年次	子ども・家庭・地域・教員の思いを生かした『表郷小情報モラル』作成 （地域全体で情報モラル教育を考える機会づくり・共通実践）

（３）研究内容・方法

A 教科等指導	①【校内授業研究会】道徳科・学級活動(2)の授業から学ぶ ②【ミニ実践･事後研】全担任教員による情報モラルに関わる指導
B 保護者連携	①【アンケート】アンケート結果と課題共有 ②【授業参観等】子どもと保護者が一緒に考える授業の実施 ③【教育講演会】保護者が情報モラル教育を学ぶ場の設定
C 計画改善	①【校内研修】よりよい情報モラル教育を考え改善する場の設定 ②【実践･改善･位置付】授業研・実践をきっかけに再考する場の設定

（４）今年度の研修の実際

時　期	方法	実　施　内　容
9月　9日	C-①	校内研修「情報モラル教育で大切にしたいこと」
9月14日	A-①	校内授業研修会①【道徳科】指導助言：静岡大学 塩田真吾 様
9月22日	B-①	情報モラルに関わる実態アンケート実施（対象：児童・保護者）
9月26日	C-①	校内研修「各教科等におけるタブレット活用場面と指導を考えよう」
10月～	A-②	ミニ実践・事後研　※互見授業として
10月　2日	B-③	福島県ＰＴＡ研究大会白河大会（「情報モラル教育」講演会）
1月20日	A-①	校内授業研究会②【学活(2)】指導助言：静岡大学 塩田真吾 様
2月　6日	C-②	校内研修「今年度の成果と課題・全体計画の見つめ直し」

Ⅱ　研究の実際について

1　子どもにひびく情報モラル指導をめざして大切にしていること

（１）教師の情報モラル教育のイメージを「今」へ変える

１人１台端末が導入されて２年目となり、本校の子どもたちは様々な教科等でタブレットを活用している。学校だけでなく家庭でもタブレット等を使うことは、当たり前となっている。

その中で「朝に『ゲームのやり過ぎで宿題やってない』『寝坊した』と話す」「授業中のタブレット活用場面で『いつの間にか脱線して違う画面を開いている』」「家庭で親から使いすぎで注意された時に、その理由がよく分かっていない」といった子どもの姿が見られている。

子どもたちの姿から、私達教師は、指導に欠かせない３つの必要性を見いだした。

①使用時間の長さだけでは実態は分からず「時間帯」「用途」を明らかにする必要性
②活用していることがゴールではなく、学ぶ目的を意識し続ける指導の必要性
③子どもの理解度は行動だけでは分からず、行動の奥底にある思いを把握する必要性

また、これまでの私達教師の情報モラル指導での課題も浮き彫りになっていた。

1 長時間利用に目が向きがちで、従来型情報モラル指導からの脱却に課題があること
2 「活用」「持ち帰り」への指導や仕組みづくりにばかり注力しがちであること
3 情報モラル指導の充実を図る一方で、指導後の子どもの変容まで見取っていないこと

本校では、ＩＣＴ教育では「情報を活用する力」、情報モラル教育では「リスクを判断し回避する力」といった「情報活用能力」を育むために、知識の教え込みではなく活用しながら指導していくことが大切だと考える。ＧＩＧＡスクール構想後、全員のタブレット活用を前提にしているからこそ、子ども全員にひびく情報モラル指導を考えたい。その際「トラブルにその都度向き合い、教育するチャンスとする」という教師の構えが欠かせない。

（２）「じっくり」「たっぷり」指導する

１年次当初、本校は「一体、情報モラルをどのように教えればよいのか」迷ったが、研修を深める中で「どこで教えるか（教育課程）」「いつ教えるか（時間）」「だれが教えるか（組織）」が明確になっていった。そこで見いだされたのが、本校ならではの情報モラル指導の視点「じっくり」「たっぷり」指導である。

【じっくり指導】
□道徳科・学級活動(2)・総合的な学習の時間といった「一単位時間」で指導する
（系統性を考えた配当だからこそ、計画的な指導を積み重ねることができる）
○実態から指導を考える
・家庭でのタブレット等の活用状況を把握する
・追加アンケートや聞き取り等で「過程・状況」をつかむ努力をする
○曖昧さに向き合う
・「なぜそう思ったのか？」等を授業づくりに生かす
・様々な見取りでつかみ「リアルな実態」を生かす
○特質を踏まえた授業づくりを行う

【たっぷり指導】
□各教科でのタブレット活用場面で、何度も担任や専科・分科担当が指導する
（子どもの実態や活用での迷いを踏まえ「短時間で」「時には時間をかけて」指導する）
○子どもの素直な「問いの連続」を大切に指導する
・「どのように使うのかな？（活用スキル）」「どんなことを考えればよいのかな？（情報モラル）」「どのように気を付ければよいのかな？（リスク回避）」のつながり
○教科指導とのバランスを考える
・「活用スキル＋情報モラル＋リスク回避スキル」「15分以内」で指導する

2　「じっくり」指導の実際

（１）【授業研】第１回校内授業研究会（道徳科・9月14日(水)）

学年：　４年	主題名：　友だちをしんじる B -(10)友情、信頼	教材名：　ゲームのやくそく（光文書院）

①子どもの実態　～日々のエピソードとアンケートから～

「友達の気持ちや事情をきちんと聞けず、自分の思い込みで友達を責めてしまう」「友達と考えが違った時に素直な気持ちが伝えられず、その不満を陰で言ってしまう」「周りとの調和を取ろうとするがゆえに自分の本当の気持ちを伝えることができない」といった子どもの実態が浮かび上がった。

②授業をつくる

子どもの内面にある怒りの気持ちは勿論、「自分にもそういう時がある」という価値観とよさを授業を通じて可視化したいと考えた。そこで、教材「ゲームのやくそく」の中の「相手の表情が見えないゲームの世界で友達に何度も約束を破られる場面」に着目して中心場面として位置付けたり、「相手の事情を聞き、はっとさせられる場面」を扱ったりすることで、行動や思いがすれ違った時に、自分の気持ちを優先して行動するのではなく、相手の気持ちや状況を考えることの大切さに気付くことができる授業を構想した。

③授業の実際

〈本時のねらい〉 相手の気持ちや状況を想像することの大切さに気付き、よりよい友達関係をつくっていこうとする心情を育てる。【B-(10)】

学習活動・内容（略）
(1) 仲のよい友達とその理由を話し合う。 (2) 教材をもとに気持ちを話合う。 ① 約束を破られた時（ゲーム） ② 友達に詰め寄った時（リアル） ③ 友達の事情を知った時（リアル） (3) 自分を見つめ直す。

〈授業後の子どもの姿〉

オンラインは顔が見えないから言葉に気を付けようと思います。

友達の気持ちをもっと考えて遊びたいです。やめる時は理由を言ってからやめようと思いました。

④事後研究会・ご指導を通して見えてきたこと

○「ゲーム」「学校」の区切りでイメージしやすい（教材のよさ、教師のこだわり）

○「イライラ」「不安」への共感を大切にする（共感的活用、実態を生かす）

●子どもは「オンラインでの相手の気持ちや状況を想像する必要性」が分かっているか？

・「相手の立場や状況を想像する意味」「多面的・多角的に捉える」ことが大切である。

・「オンラインゲームをどこまで想像できていたか」子どもの実態から手立てを講じたい。

・「なぜ約束をやぶってしまったのか？」といった10分で退出した登場人物の気持ちを考えさせることも必要だった。

（２）【授業研】第２回校内授業研究会（学級活動(2)・1月20日(金)）

学年：　５年	題材名：　なりたい自分になるためにタブレットやゲーム機等の使い方を工夫しよう【学級活動（２）ウ】

①子どもの実態　～日々のエピソードとアンケートから～

学級の子どもの約８割は、タブレット等を３時間以上で使い過ぎていると感じている。さらに、夢中になり就寝が遅くなったり宿題が後回しになったりしていて生活に支障が出ている子どもや、長時間利用により、頭痛や肩の痛み等の身体的な影響を受けている子どもがいる。また、子どもの多くが、保護者からタブレット等の使い過ぎと注意されているが、「やり過ぎ」「使い過ぎ」と注意する保護者の思いや理由を理解していない状況である。

②授業をつくる

教師だけでなく保護者が「やり過ぎ」「使い過ぎ」を指導する背景にある思いや理由である「タブレット使用の時間や時間帯、方法によっては、身体や心、生活へ影響がある」ことや「自分の目標に向かうためにタブレット等と有効に関わってほしい」といったことについて子どもたちに考えさせる必要性があると考え、本時の題材を設定した。

③授業の実際

〈本時のねらい〉　理想とする姿や目標に向かって頑張りたいことのためにタブレット等の使い方を振り返り、使い過ぎの原因を見つめて、改善する方法や工夫を考えて意思決定し、実践への意欲を高めることができる。

学習活動・内容（略）
(1) タブレットの使い方を振り返り、本時のめあてをつかむ。 (2) 使いすぎによる問題点を考える。 ・長時間の使用による悪影響 ・身体・心・生活 (3) 使いすぎを防ぐ方法を考える。 ・区切る・頼む・置き換える (4) 工夫を選び、実践へつなげる。 ・自由な時間がある日だったら…

〈授業後の子どもの姿〉

使いすぎないように、他の楽しみをするのもいいな。

友達が考えた防ぐ工夫を試してみようと思います。私は、家族に声をかけてもらうようお願いしてみます。

④事後研究会・ご指導を通して見えてきたこと

○「分かってはいるけれど、止められない」を考える必要がある。

・「止める工夫」の具体は、話し合う価値がある。

●養護教諭と連携して授業を行い「客観性のあるデータ」を提示した方がよい。

●「使いすぎを防ぐ」「時間を上手に使う」指導は違うのではないか。

・「なりたい自分」の目標は、行動目標であり、「５Ｗ１Ｈ」を踏まえて、より具体的にえがく必要がある。

・子どもたちは「暇な時間にやりたいこと」を持っていないことも多い。単発授業では効果が薄いため、年間指導計画に位置付ける必要がある。

3　「たっぷり」指導の実際

（１）情報モラル教育に関わる研修

年間を通じて、ふくしま情報モラル協議会で共有された県内の情報モラル教育研究校の取り組みやアドバイザー講師陣のご指導をもとに「本校ならでは」の情報モラル教育を話し合う機会を設けた。その中で、第２回校内研修「各教科等におけるタブレット活用場面と指導を考えよう」では、研究の一つである「タブレット活用場面と指導」について具体を検討し、指導で大切にしたいことを共有した。

（２）情報モラル「ミニ実践」

この校内研修をきっかけに、全担任が「情報モラル『ミニ実践』」として、各教科等のタブレット活用場面での情報モラル指導の実践を行い、互いに見合って指導力を高めた。多くの実践から、２つ紹介する。

国語科

６年生「調べる時に使おう・調べた情報の用い方」

ねらい		必要な情報の調べ方を知り、調べた情報を適切に用いることができる。
情報モラル	必要性	**タブレットを用いて調べ学習を行う際に、インターネットの情報が全て真実とは限らないことを知るため。**
	活用スキル	ロイロノートの検索で必要な情報を調べる方法
	情報モラル	**検索した情報の信憑性を考える**
	回避スキル	信憑性を検討し、適切なものを選択する

生活科

２年生「もっと なかよしたんけん」

ねらい		町たんけんに向けて、相手や場所に応じて「どんな行動が正しいのか」を考えることで、適切な行動や接し方を学ぶ。
情報モラル	必要性	**町たんけんでそれぞれが写真を撮影する際、偶然人や商品が映り込むことが予想されるため。**
	活用スキル	タブレットで写真を撮る方法
	情報モラル	**撮る前に許可が必要な写真はあるのか考える**
	回避スキル	肖像権等によるトラブルを考え、撮影する

（３）「ミニ実践」から見えてきたこと

○タブレット活用場面での情報モラル指導は、子どもの必要感もあり、有効である。

●「いつ指導するのか？（タイミング）」「何を指導するのか？（指導内容）」「どのように指導するのか？（指導方法）」に迷いが生じた。学校として「重点的に指導する内容」「指導する学年」「主に指導する教科等」を明らかにする必要がある。

Ⅲ　成果と課題について

1　今年度の取組みから

【実態把握】

○静岡大学塩田真吾先生に実態把握の「アンケート項目」について相談させていただいた。昨年度実施のアンケート項目に加え、「何時間からが使いすぎだと感じているか」といった『認識のズレ』を把握することで、情報モラルの指導に生かすことができるとご指導いただいた。

【授業研究会・「じっくり」指導】

○第１回情報モラル教育校内授業研究会（道徳科）において、義務教育課肥沼志帆先生と静岡大学塩田真吾先生に指導助言をいただいた。道徳科の本質に根ざした授業づくりについて価値付けていただき、学校研究の成果を教職員が感じ、研究推進への意欲を高めた。

○第２回情報モラル教育校内授業研究会（学級活動(2)）において、静岡大学塩田真吾先生に指導助言をいただき、義務教育課伊藤貴史指導主事と加藤真理子指導主事に講評をいただいた。特別活動の本質を踏まえ、担任教師の主観的な見取りとアンケートで把握している認識のズレに加え、「なりたい自分と現在の生活・タブレット使用状況」「保護者の声かけと子どもの受取り方」を授業の中に取り入れて、課題意識や原因追求、実践への必要感を高めた。指導助言では、これまでの情報モラル授業にはない挑戦的な実践と価値付けていただき、学校研究の積み重ねの成果と「実態を生かす」姿勢の大切さを改めて考える機会となった。

【校内研修・ミニ実践・「たっぷり」指導】

○校内研修で「タブレット活用場面と指導」の具体を検討し、全担任が「ミニ実践」を行った。「修学旅行でタブレットを持っていく前に」といった時期や子どもの必要感から、「国語科の調べ学習」等の学習内容とタブレット活用場面で、「活用する目的とは違う使い方をしてしまう」といった子どもの実情を授業づくりに生かし、各学年・教科等で実践に取り組んだ。このミニ実践づくりの過程で、担任教師は「子どもの実態が見えていない」「従来型情報モラルから脱却できていない」「情報モラル教育で学ぶべき内容が分かっていない」といった未熟さを感じつつも、「これからの子どもたちになくてはならない力だからこそ」という情熱をもって取り組んでいる。担任教師が相談できる場・協働体制の必要性を感じている。

【教育課程】

●「どのような力をつけるのか」「その具現した姿」について、まだまだ「その時だけ」の指導になりがちであり、「学年・時期だからこそ」を視点に、学校の重点とどの教科等で何を学ばせるかを明記した全体計画・配当等を、教育課程にしっかりと反映させていきたい。

【保護者との連携・教育講演会】

●ＰＴＡ本部役員から「保護者が情報モラル教育を学ぶ機会をつくりたい」との声が上がりＰＴＡ教育講演会として静岡大学塩田真吾先生のご講演を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の打撃を受け、実施できなかった。来年度は「実現可能な方法」で実施したい。

2　３年次に向けて

・１人１台端末がますます定着し、タブレットを「文房具」的に活用するようになる。だからこそ、教師がタブレットは学びの手段であることを忘れず、学びに変える努力が欠かせない。

・情報モラル教育は即効性はないからこそ、「じっくり」「たっぷり」の視点から、年間を通じて指導を積み重ねる体制をつくりたい。